

論文審査の結果の要旨

氏名 宮川敬之

本論文は、和辻哲郎の倫理学体系の根幹をなす「間柄」概念がいかにして成立したかを、「人格」と「表現」をめぐる和辻の思索の展開を分析することによって明らかにしたものである。周知のように、和辻倫理学においては、生の主体は、個的人格ではなく、共同的な存在（間柄）であるとされ、生は、「間柄の表現」＝実践的行為的連関として捉えられる。通説的な理解では、「間柄」という特異な主体概念が和辻の思索に登場するのは、昭和4～5年の時期、マルクス思想の影響を契機としてのことであるとされる。しかし、「間柄」の発想が、人格主義思想の圏内にあった大正期の和辻の思索とどのような関係にあるのかは、明らかではなかった。本論文は、大正7年頃から昭和9年頃に至る和辻の主要著作を精密に分析することによって、「間柄」がいかに醸成され、また、和辻の思索の展開の中でどのように位置づくのかを明らかにした労作である。

三部構成からなる論文の第Ⅰ部において、論者はまず、「生は、自己の内生の表現である」という考えが、和辻の思索の出発点をなし、また終生にわたる基本関心であったことを見定める。そして、この考えが「表現」をめぐる哲学的探究へと展開していく契機となったのが、「人を神の姿に高める」ギリシャ美術と、「神を人の姿に現す」東洋美術の、「様式の差異」の発見にあったことを、大正年間にかかれた、和辻のいわゆる文化史的諸業績を丹念に読み解くことによって明らかにしている。

第Ⅱ部では、この様式の差異をめぐる思索が、「人格の表現」における差異の問題として深められていく過程が、主に『原始キリスト教の文化史的意義』『沙門道元』『原始仏教の実践哲学』の三著作の分析を通じて論じられる。ここにおいて論者は、この過程が、表現から表現されるもの（人格）が引きはがされ、表現が自立し、「こと」化していくような特異な表現のありように和辻が注目し、追究していく過程であったことを明らかにしている。このことは、和辻の関心が、表現の内奥に君臨する人格という人格観を離れ、「表現そのものの統一」という新たな人格観へと、方位を見定めていったことを示しているとされる。第Ⅱ部で示される多くの論証、すなわち、『正法眼蔵』『道得』巻への着目が、やがて「間柄」の成立を導く人格観変容の先触れであったこと、また、和辻の原始仏教研究の動機が、普遍我・経験我を共に排除したところに「人格」に替わる「主体」を発見することであったこと、さらにその「主体」は十二支縁起における「行」の把握において見いだされていること等々の論証は、従来の和辻研究の面目を一新する大きな成果であり、本論文のクライマックスである。

第Ⅲ部ではまず、「主格」が抜き去られ、「こと」乃至「かた」としての人格概念が確立していくさまが、和辻のカント論である『人格と人類性』を手がかりに、西田幾多郎及びハイデッガーの「表現」論との異同を見定めながら論じられる。すなわち、カント的な人格構造における超越論的人格性が「かた」としての人格に置き換えられ、その超個人的あり方が無差別なる「空」という概念であらわされる。そして、この超個人的な「かた」「こと」としての「我」が、その超個人性ゆえに「共同存在」にすりあわされることによって、「間柄」概念が確立したものであると結論づけられる。

以上、本論文は、すぐれて哲学的な思考の内的展開を、初出論文や書き換えの過程を綿密に検討する、きわめて実証的な手法によって明らかにしたものである。特に和辻の仏教研究に関して得られた多くの重要な新知見は、学界に裨益すること大である。一方で「展開」過程を明確化しようとするねらいが先行して、テキストの議論が持つ幅やふくらみをやや性急に「変化」として一面化しがちなこと、あるいは、「通路」など和辻固有の含みのある概念に対してなされる比喩を用いた説明が明瞭性を欠くことなど、今後の検討にまたれる問題点がないわけではない。とはいえ、多彩かつ多岐にわたる和辻の思索の内奥を貫く基本構造を明らかにしたことの意義は大きい。よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであると判断する。

(別紙 2)